

解説 「江戸の祭り 青梅の祭り」

【はじめに】

現在、五月二日と三日に行われる青梅の祭り「青梅大祭」は、江戸時代の祭りの風情を引き継いだものです。

いま、祭りというと、神輿（みこし）を思い浮かべる人が多いのですが、実は、江戸時代の祭りは普通、神輿は神社の神輿が出されるだけで、町々から出されるのは神輿ではなく、山車（だし）でした。



明暦二年（1656年）の山王祭の様子を描いたとされる屏風図（部分）。山車は人が担ぐものも多く、その形もとてもシンプルです

【華やかだった江戸の祭礼】

徳川家康が、現在の東京、かつての江戸に幕府を開いたのは、いまから約四百年ほど前の一六〇三年のことでした。江戸時代はその後、二百六十年あまり続きます。

幕府ができたころの江戸は、何にもないような田舎でしたので、家康は京都や大阪をはじめ、全国各地から職人や商人など、たくさんの人を呼び寄せ、町作りをしていきました。

そうした中で始まった江戸の山車祭りは、最初の頃は、京都の祇園祭をはじめ、各地の祭りのまねをしていた部分が多かったようです。

江戸の各町では、神社の神輿を中心にして、それぞれに山車を曳き出し、行列を作りながら、それを人々が護り、付き従って練り歩く形でした。

山車の形もとてもシンプルで、柱を立ててその上に飾り物をする程度でした。車輪の付いたものもあまりなく、人が肩で担ぐものも多かったのです。

江戸の祭りのスタイルが、各地の祭りの物まねから江戸独自の形になり始めたのは、江戸に幕府ができてからおよそ、百年ほどが経ってからのことです。

江戸の祭りとして名高いのは、山王権現（現在の千代田区永田町の日枝神社）の「山王祭（さんのうまつり）」、神田明神（現在の千代田区外神田の神田神社）の「神田祭（かんだまつり）」の二つです。この二つの祭りは、江戸城に入ることを許された特別な祭りです。「天下祭（てんかまつり）」と呼ばれ、「お城の將軍様に見てもらえる」ということで、とても気合いを入れて、祭り行列の中にさまざまな工夫や趣向を盛り込んだのです。

そのもつとも象徴的なものが、山車のほかに、行列の中に組み込まれた「附祭（つけまつり）」と呼ばれるものです。

附祭には、昔話などをテーマにした仮装行列の「練り物（ねりもの）」、昔話の登場人物などを巨大模型化した「造り物（つくりもの）」、揃いの衣装を身にまとった人たちが踊りをみせる「地走り（じばしり）」、移動型の舞台の上で三味線や鼓などのお囃子に合わせて踊りなどをみせる「屋台（やたい）」といったものがありました。

さらに、附祭のほかに「御雇祭（おやといまつり）」といって、「こま回し」「曲芸」「大神楽」などの見世物が行列に加えられることもありました。

江戸の祭りは、いうならば、参加各町が競い合いながら、そのときどきの最新流行の芸能や芸術をみせる一大ショーイベントだったのです。



山王祭の附け祭りの様子を描いた絵図。中央が踊り屋台で、右が底抜け屋台

中でも屋台はとても人気があったのですが、次第に派手になって、お金もたくさんかかってしまうことなどの理由から、その後、幕府によって禁止されてしまいました。

そこで、祭りをする人たちは知恵を絞り、舞台部分とお囃子部分とが別れた「踊り屋台」と「底抜け屋台」という形を作り出しました。この底抜け屋台は、青梅の祭りでも、ほんの一時期ですが、登場したことがあります。

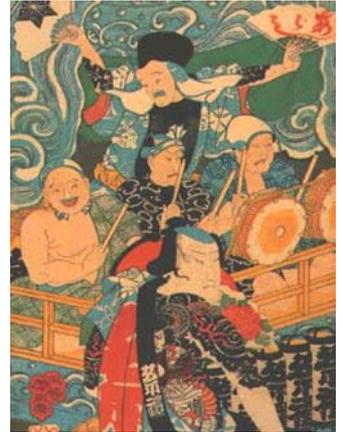
【江戸祭り囃子の登場】

さて、山車の上で行われる、いわゆる江戸風の「祭り囃子（まつりばやし）」が初めて、祭りに登場したのは、江戸時代の中頃だったといわれています。それまでは、大きな太鼓を「ドンドン、カッカツ」と叩くだけの、現在聞かれるようなお囃子からはほど遠いものでした。



江戸時代の中頃から、山車の上では、祭り囃子が演じられるようになり、山車の形も次第に変わってきました

そこに、江戸の周辺の農村などで流行りだした、それまでには聞いたこともなかったような楽しく軽快なお囃子が登場し、一躍大人気となりました。山車も、この楽しい「江戸祭り囃子」の出現で、太鼓を取り付けられるようになるなど、お囃子のためのスペースが設けられた形へと、次第に変わっていったようです。



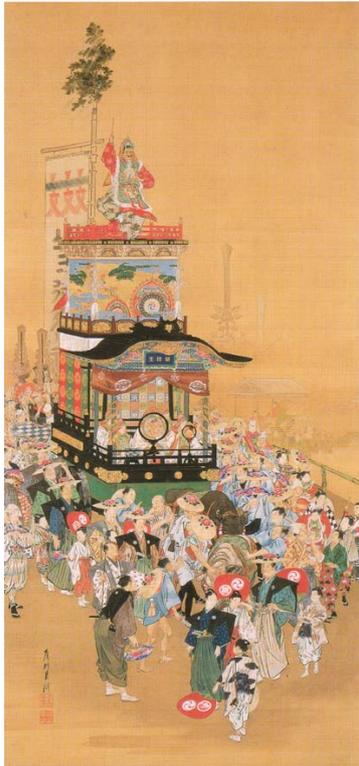
神田祭での祭り囃子の様子。華やかな江戸祭り囃子は、青梅にも伝えられています

山車とワンセットとなる祭り

囃子が組み込まれたことで、江戸の祭りは、さらに華やかなものとなりました。江戸時代が始まって二百年あまりを経た頃が、江戸の祭りをもっとも盛大で、華やかな時期だったようです。

そして、江戸時代も終わり頃になると、「江戸型山車」と呼ばれる独特の形の山車（鉾山車…ほこだし」ともいいます）が登場します。江戸型山車には、頂上に立派な人形が飾られ、その下には豪華な幕が張り巡らされ、お囃子をするための舞台も備えられています。人形と、その下の一層は、エレベーターのように上げ下げができる仕組みになっていました。

この豪華で美しい江戸型山車の登場で、江戸の祭りが完成したと言ってもよいでしょう。



【滅びてしまった江戸の山車祭り】

いまから約百四十年前に、江戸時代は終わりを告げ、明治時代となり、江戸は東京になりました。

明治時代になると、それまでの政治や経済のシステム、あるいは、町内組織はまったく変わってしまい、祭りを支える基盤がなくなってしまいました。

明治時代になってからもしばらくは、山車の祭りは行われていたのですが、金銭的な理由や、そのほか多くの理由によって、山車の祭りは行われなくなってしまうました。

天下祭の一つであった神田祭は明治十七年を、また、江戸最大で日本一の祭りでもあった山王祭は明治二十二年を最後の盛り上がりとして、その後、江戸の山車祭りは一気に衰退していきます。

山車の祭りが行われなくなってしまうと、山車を持っていても仕方がありません。山車は、蔵の中にしまわれたままになったり、東京の周辺都市に売られていったりしました。当時、江戸との繋がりも強く、裕福でもあった

青梅は、そうした山車のいくつかを、江戸時代の末期から明治時代の初期頃に買い取ったのです。

ちなみに、旧江戸のエリア内で蔵の中などにしまわれていた山車のほとんどは、いまから八十年ほど前の「関東大震災」で発生した火災と、六十年ほど前にあった「太平洋戦争」での空爆によって、焼失してしまいました。自然災害はともかくとして、戦争で貴重な文化財を失ってしまったことは、誠に残念無念なことであったというほかありません。



江戸の豪華な山車祭りは、明治時代に終わりを告げました

【青梅の祭りの移り変わり】

青梅の住吉町には、いまから六百五十年ほど前につくられた「住吉神社」という神社があります。昔は「住吉様」「住吉大明神」などと呼ばれていたのですが、明治時代になってから「住吉神社」という名前に定まりました。

住吉神社では、定かな記録はないものの、五百年ほど前に、立派な本殿が築造されたのを機に、その日を祭礼日に定めた、といった伝えがあります。それが、四月二十八日（明治六年の太陽暦の採用以前は三月二十八日）で、この日には毎年、住吉神社ではしめやかに、例大祭の神事が執り行われています。



青梅の住吉神社

江戸時代になると、青梅は、江戸の人たちにならざる生活物資を供給するようになりまます。青梅の町は次第に栄えていき、それに伴い、住吉神社の祭りも華やかになっていきました。そして、明治時代の初期頃に、青梅のお金持ちの商人が江戸から山車を買取ったことから、青梅の山車祭りの歴史が始まりました。

青梅が江戸から買取った山車の上には、「原舟月（はら・しゅうげつ）」や「仲秀英（なか・しゅうえい）」といった、江戸末期から明治期にかけてとても有名であった人形師たちが作った立派な人形が飾られています。これらの山車人形はいまも、貴重な文化財として大切に保存されており、青梅の祭り当日には、山車祭りを始めた五つの町内に設けられたそれぞれの「人形場（にんぎょうば）」に飾られ、間近で観ることが出来ます。いずれの山車人形も、他の地域では見ることのできない、大変な名品です。



森下町「武内宿禰（たけのうちのすくね）」



上町「日本武尊（やまとたけるのみこと）」



住吉町「神功皇后（じんぐうこうごう）」



仲町「静御前（しずかごぜん）」



本町「神功皇后と応神天皇（おうじんてんのう）を抱く武内宿禰」

さて、明治時代の青梅の祭りは、山車を牛に曳かせるなど、江戸の祭りのスタイルがそのまま、採り入れられたものでした。

青梅では、明治四十四〜四十五年頃



に、町の中に電線が張り巡らされたため、背の高い鉾山車は運行しにくくなり、時が明治から大正へと移る時期に、山車は屋根部分が改造されることになりました。大正時代の祭りには「屋台型」に生まれ変わった山車が登場するので。



【お囃子と拍子木が主役に
〜青梅の祭りの見どころ】

青梅の祭り囃子のルーツは江戸の祭り囃子で、山車が青梅に来たのと同じ、明治時代の初め〜半ば頃に伝えられたようです。ただし、最初にお囃子が伝えられた先は、青梅の中心にある町ではなく、周辺の農村などでした。

青梅の祭りでは、山車を持っている中心地の町は、お金を出して、周辺の農村などからお囃子を雇っていたのでした。この風習は江戸の祭りと同じで、川越の祭りなどでは、いまでも続けられています。

大正時代になって、山車が屋台型になり、山車の上に人形が飾られなくなると、山車の舞台上の「お囃子」と山車行列を先導する「拍子木（ひょうしぎ）」が青梅の祭りの主役になっていきました。粋で華やかな江戸の祭りスタイルを基盤としながらも、その上に独自の『青梅らしさ』が加えられるようになってきたわけです。

華やかに着飾った拍子木に「手古舞（てこまい）」、多くの人が声を合わせて謡う「木遣り（きやり）」、そして、楽しく威勢のいいお囃子と、その最大の見せ場となる山車同士の「競り合い（せりあい）」は、江戸の名人形師たちが作った立派な山車人形とともに、青梅の祭りの大きな見どころになっています。



解説作成…墨江町囃子連 村野公一

（平成十八年四月・初版作成

／平成十九年四月改訂

／平成二十五年四月再改訂）